F2-17

スケートボーダーの公共空間利用に対する認識と社会的許容

Awareness and social tolerance of skateboarders on public space use

○榎本　桂介[1], 牟田　聡子[2],八藤後　猛[2]
*Keisuke Enomoto[1], Satoko Muta[2], Takeshi Yatogo[2]

In recent years, Japanese public spaces have eliminated children's play, homelessness, and extreme sports. In particular, skateboarding, which is an extreme sport, is excluded in public spaces, despite its increasing social recognition. The purpose of this study is to clarify why the skateboarders who won the park returned to public spaces such as the streets. Also, clarify the factors that allow skateboarders to use public spaces. From these, the purpose is to propose new public spaces and town development from the perspective of skateboarders.

1.　研究背景

スケートボードはオリンピックの正式種目に採用されたこと,さらに新型コロナウイルスによりチームスポーツの実施が難しくなったことで,社会的認知が広がっている.それに伴いスケートボードで滑走できる専用の空間（以下,パーク）は増加している.

スケートボードは路上から発生した文化であり,パーク以外の路上や公開空地等の公共空間（以下,ストリート）で滑走する者が後を絶たない.そのためスケートボードで滑走することがストリートにおいて迷惑行為と認識され,ストリートでは排除対象となっている.

2. 研究目的

パークがあるにもかかわらず,スケートボーダーがストリートで滑走を行う理由を把握し,その上でスケートボーダーがストリートを利用できる要因を明らかにする。さらに,スケートボーダーの視点から新しいストリートとまちづくりを提案することを目的とする.

3. 研究の位置づけ

田中[1]はスケートボードを据えて都市にに生きる若者の経験的な側面を深く掘り下げて記述的分析し,スケートボーダーの広場獲得と方法について明らかにしている.矢部[2] [3]は都内の公園やパーク開設の経緯,現況,さらにスケートボーダーの要望の方向性と行政の対応を明らかにしている.

これらはストリートに関する研究である.本研究は公共空間の使用目的が異なるスケートボーダーとそれ以外の人々が,ストリートにおいて共存する新しい公共空間とまちづくりを提案を行うために，ストリートにおけるスケートボーダーの利用空間を捉える.

4. 研究方法

文献調査では,創刊年と発行時期,内容等を踏まえ対象文献に「SLIDER MAGAZINE」を選出し,掲載されている写真から,スケートボードが行われている場所の分析を行った.さらにプロスケートボーダーのインタビューを記事を収集,内容を分析し,プロスケートボーダーの公共空間利用に対する考えを把握した.

その上でストリートでスケートボードを行うプロではないスケートボーダー4 名（千葉県出身で在住の 19 歳から 26 歳の男性 1 名,女性 3 名.）に対してインタビュー調査を実施し,公共空間利用の認識を把握した.

5. 文献調査

5-1. 調査結果

「SLIDER MAGAZINE」39 号[4]および 42 号[5]に掲載されている写真の分析を行った.分析にあたって，Photo1 および Photo2 を参考に、掲載されている写真をストリートまたはパークに分類した. その結果,39 号には 129 枚の写真が掲載され,ストリート 115 枚(89%),パーク 14 枚(11%)であった.42 号には 73 枚の写真が掲載され,ストリート 72 枚(99%),パーク 1 枚(1%)であった.

次に 39 号に掲載されているスケートボードと社会をテーマにしたインタビュー[4]より「ストリートでの滑走が厳しくならないなら社会に受け入れてほしい」（１人），「ストリートはスケートボードのための空間でないところに魅力がある.パークは技術を磨く場所であり,それをストリートで発揮することが重要である.また管理者等からの注意（以下,キックアウト）こそストリートの魅力である.」（１人）という回答を得た.

5-2. 考察

写真記事から，スケートボードの活動はストリート

１：日大理工・院（前）・まち　２：日大理工・まち・教員

に集中していることを把握した.ストリートに写真が偏ることで,これら雑誌を購読する読者に対して,「パークよりストリートでスケートボードを滑走することが一般的である」,という認識をもたせる可能性がある.

インタビュー記事からは，スケートボーダーは迷惑行為を文化の１つとして考えていて,パークはスケートボードの技術を磨く場所,ストリートはその磨いた技術を発揮する場所等場所ごとに役割の違いがあることを把握した.すなわち，ストリートとパークの持つ役割が異なるため,パークを建設してもスケートボーダーのストリートでの滑走はなくならないことが示唆された．またスケートボーダーの社会に対する許容とストリートの魅力について把握した.

6. インタビュー調査

6-1. 調査結果（Table.1）

「スケートボードの社会からのイメージ」については,全員が「悪い」と回答した.しかし「都市部は厳しいが,地方は寛容な印象」（１人）という回答もあった.「スケートボードの周囲の反応」については,「若い人は肯定的,年齢の高い人と警察等は否定的」（１人）という回答があった．さらに,「日本におけるストリートでのスケートボーダーと様々な人々との共存の可否」に対し「共存しない格好よさもあるため,共存する必要はない.」（１人）という回答をから得た.

6-2. 考察

スケートボードの滑走場所により考え方に違いがある可能性があること，さらに周囲の年齢によりスケートボードに対する考え方が異なること，社会との共存を望まないスケートボーダーもいることを把握した.

7. まとめ

本研究からスケートボーダーは社会的許容を模索していて,ストリートで緩やかな共存（現在のストリートでスケートボーダーに対して行われている規制を一部緩和させる）が必要不可欠であると考える.

Photo1.Cases on the Street [6]

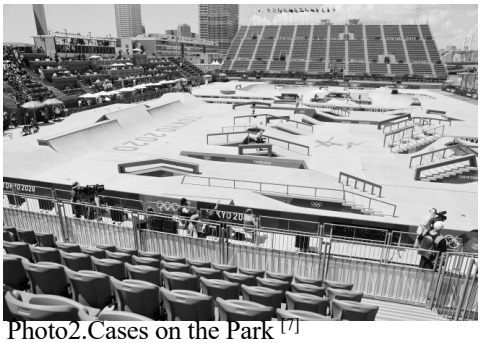

Photo2.Cases on the Park [7]

8. 参考文献

[1] 田中研之輔 :「都市空間と若者の「族文化」」 スポーツ社会学研究 第 11 巻 pp. 46-61. 2003

[2] 矢部恒彦 :「東京都内の公園におけるスケボー活動の現状 4」日本建築学会 学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 2007

[3] 矢部恒彦 :「東京都内の公園におけるスケボー活動の現状 5」日本建築学会 日本建築学会計画系論文集 2008

[4]「SLIDER」, ネコ・パブリッシング, NO. 39, 2019. 6. 28

[5]「SLIDER」, ネコ・パブリッシング, NO. 42, 2020. 3. 31

[6] 松原 孝臣 :「岡本碧優 : 新種目スケートボード女子、世界ランク 1 位の 15 歳―東京五輪の金メダル候補たち (7)」, Nippon. com, 2021. 7. 15, https://news.yahoo.co.jp/articles/2dccc121d074575cc2e54147c559221bc6777d68, 最終閲覧日 : 2021. 9. 19

[7]「有明アーバンスポーツパーク」, 時事ドットコムニュース, https://www.jiji.com/jc/p?id=20210725105603-0038607580, 最終閲覧日 : 2021. 9. 19

Table1. Interview survey results

回答者 NO	年齢とスケートボード歴	社会からのイメージ	周りの反応	共存出来るか
プロ男性 A	23 歳 13 年	都市部は厳しいが地方は寛容な印象.	不思議がられる.	全員がパークで滑走すれば可能.
男性 B	25 歳 7 年	悪い. 騒音や人や車とぶつかりそうになるため.	若い人は肯定的. 年齢の高い人と警察等は否定的.	ストリートの文化全般を受け入れれば可能.
女性 C	26 歳 9 年	悪い.	悪い反応はない いい反応もない.	もっとスケートボードを知ってもらえれば可能.
女性 D	21 歳 3 年	悪いところだけ 目立っている.	会社や親族からは 批判しかない.	経験させる場があれば可能.
女性 E	19 歳 3 年	良くない.	新型コロナウイルス流行以降は羨ましがられる.	共存しない格好よさもあるため, 共存する必要はない.